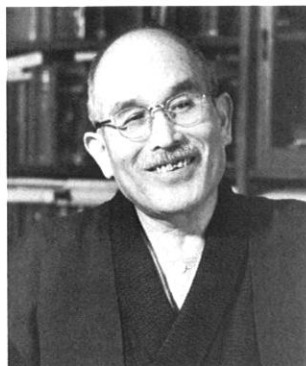


# 汲古一心

## 『硬質の書』(一)



中村素堂先生

このごろは個展でもなければ、まず軸仕立ての表装を展覧会で見るといふことはなくなった。黙っていても、出品作品は額装式のものにして出すのが常識といつても過言ではないだろう。

本来軸になるような形式の作品でも軸型の額になっている。従来のままのものは、日

本問向きの扁額として書いたものの、二枚折、六曲、風呂先などの屏風くらしいのもので、卷子、帖仕立てのものも全くなかった。いわゆる硬質の表装ともいえるものにならなくなってきているようだ。

公募の展覧会で、軸、帖、卷子ものを受け付けないと規定したのは戦後のことで、毎日書道展でも第一回の総合書道展といつていたころには、まだ軸装のものを陳列していた。それが三十年代に入ると前後にはみな額装にして出すようになり、一番遅く篆刻も印材だけ一括してケースに置いて、印譜を小型の額として壁面で見せるようになった。

いよいよこうなってみると、古い都美術館は冷暖房などももちろん設備がなく、夏に多かった書道展などは、人間の側からは風通しのよい室が歓迎されても、軸もの(二メートルくらいの長いものが普通であったから)の風で舞いあがるのや、軸が外れてしまうものなどさえあった。

極暑の七、八月ごろ、観客の足遠い日など、ところどころ明るくて風の入る室は、軸の壁を打つ音がして何だか少し侘しい気分さえあった。

今日では、この額装がすっかり板について、軸のように糊加減によつてはまるまわって作品の見にくいなどということもなく、いかにも落ち着きを持って壁面に安定している。

絵画のほうは油絵はもちろん、随分前から屏風か額であったと思う。会場芸術としてのゆき方では書作品はやはりいくらか後れていたのだと思う。

私もものように出品するほうの側からいっても、軸表装よりは経済的にも時間的にもずっと都合がよくてこの形式は大歓迎であるが、ただこれらの作品が展覧会後にも使うという立場から、軸装に改作するか、あるいはそのまま洋間の壁に用いられているようであり、保管となるとマクリにしておくというような向きもある。

生活様式が相当な勢いで移り変わって、人々は遂々座る生活を捨ててゆくし、経済事情もあって利用価値の少ない空間を極度に引き緊めて、実に巧妙な立体的利用など、すべて組み合わせもののように工夫されてきた。(つづく)



「織文」 一昭和50年一